リベラルアーツ七科の誕生をたどって　―　始まりへの軌跡

構想
2005, volume 4
38 - 42

半田智久（静岡大学）
Motohisa HANDA (Shizuoka University)

はじめに

本報告の目的はリベラルアーツとは何かという意味を尋ねたときに、しばしば登場するセブンリベラルアーツ、自由七科という妙に明確な科目設定の始源に迫り、その７つであったことの由縁とそこに至る経緯をあきらかにすることにある。

リベラルアーツ発祥の源はピュタゴラスからつながるソクラテス / プラトンの自由人の知に遡ることができる。自由人の知は知を愛求する人たちの営みであるが、その営為そのもの、あるいはそこに至る過程におかれた諸学が、ギリシアにおいてエンキュクリオス・パイデイアと称された全人的、文化形成的、学科円環的、あるいは教えと学びが回帰する諸学であった。やがて時代の主役がヘレニズムを介してローマへと移行するなかで、ギリシア的なものはラテン的なものへと転換する。リベラルアーツという呼び方は、その道程においてエンキュクリオス・パイデイアについてローマ前半、共和政の末期にキケロらが翻案的に表現したラテン語を始まりとする。

その名称や意味のもとでローマ人たちがあげた学科目は語る人[*]によってその構成内容をやや異にするが、あげられる重なりの程度が比較的高いものから並べれば、文法、幾何、修辞 (弁論)、天文、音楽、数論 (算術)、論理 (弁証) といったところが頻繁に重なる。ときにこれらやその一部に文芸、医術、法律、建築、絵画などが加わる。ウィトルウィウスがあげた例では歴史や哲学も入るが、これは特異例である。一般的には歴史は文法において素材として語られ満たされたようであるし、哲学はこれらの学びの先につづいていく綜合知のような位置づけにあったからである。文芸という科目区分も曖昧で、ふつうは音楽や文法にまたがったものと認識されていたようである。

ローマにおけるリベラルアーツの特性と学問の状況

このローマに誕生したリベラルアーツのもっとも特徴的な点をあげるならば、ギリシアのエンキュクリオス・パイデイアの内容に加えて医、法、建築などを並べることにやぶさかではなかったところといえるだろう。ここではこのような特徴を持つリベラルアーツ始源の姿を「ラテン・リベラルアーツ」という名をもって表現し、後のセブンリベラルアーツと弁別する。

リベラルアーツという概念がそのことばと共にローマで生誕した経緯からすれば、そこで華として開花したラテン的実学を知を愛し求めるラインに並べ置く自由性こそがまさにリベラルアーツという名称のもつ本懐ともいうべきところのように思われる。むろん、古代ギリシア的なあり方からすれば、土木、建築や医術、呪術といった実用職にかかわる仕事の学びは、靴職人と同様で、基本的には奴隷や異邦人たちの伝習のなかにあって自由人の営みとは一線を画していたわけであり、ローマにあってもその構造が突然変化したわけではなかっただろう。だが、そうした土台のもとにあったエンキュクリオス・パイデイアがローマにおいてラテン・リベラルアーツに翻案されたときに、生粋のローマ人は文法や修辞を含めてそのいずれについてもギリシアの奴隷教師に学んだのだし、ローマ繁栄時のラテンの陽光のもとでは奴隷とて事と次第では解放されて政治家にも哲学者にもなりうるのであった。だから、黒を白と納得させる雄弁も実学も諸々の学のその合奏による協和こそがローマの平和をもたらすものというパクス・コンソルティス（Pax Consortis）という暗黙的理念が、リベラルアーツの始まりに宿された精神であったと考えることにそれほどの無理はないだろう。

とはいえ、このラテンリベラルアーツがローマ

にあっては一定の教育機関でカリキュラム化されていたというわけではない。またしばしば類推されるように、専門的な学問を学ぶための基礎科目とか教養科目として位置づけられていたわけでもない。多くの場合、そのなかの何かを極めて教師や技師や学者になるにしても、基本的にはすべてが横につながるかたちで学ぶ必要が語られていた。またそうしたラテンリベラルアーツのあり方の成果として、雄弁家や医者になっても、その仕事が極まっていけば自然と哲学者とも称される仕事をするにいたったのである。だから、古代の賢人たちはたいていの場合、こんにちからすれば驚異的な多芸多才となる。ヴァロしかりキケロしかりガレノスしかりである。だが、それは学びと探究のプロセスが綜合知のなかで育まれていたからなのであって、それがまさに自由人の知であり、リベラルアーツという名で語られる元来の由縁であったともいえよう。

ここでいうラテンリベラルアーツを、実学の称揚と、誰もがこぞってそれを学んだというイメージで捉えるとすれば、それは適切とはいえまい。医学や建築に代表される学問がリベラルアーツの仲間入りを宣言し得たのは、ギリシア由来のエンキュクリオス・パイデイアを学び、そのうえでその道の達人となって哲学的思考をなし得た人物によるところのものである。それはちょうどローマ帝政後半に、帝国のどこかで突然「われこそが真のローマ皇帝なり」と僭称するところから戦いを始めて実際、皇帝の座についてしまうような一種の実力主義的アナーキカルな自由性のもとにリベラルアーツが息づいていたということでもある。

したがって、そうしたラテンリベラルアーツにあっても、一般的な性質においては、雄弁家が政治的な意義をもってもてはやされた共和政の時代を経たことや、法賢慮が重視された経緯もあって修辞（弁論）を前面に据えてその基礎としての文法 (適切な読み書き) が強調されたことはあきらかである。対して数学諸科はギリシアにおける位置づけと比較すれば、背後に退いたかたちになった。ここにみる微妙なシフトは世界認識にあたって法則の発見による自然理解から、人間や人間のつくり出すもの、しでかすことへの関心と理解、すなわち人生哲学的な方向へ学ぶことの関心が動いたことあらわしていよう。

この趨勢は哲学においても同様であり、ギリシアで形而上学に向かった関心はストイシズムやエピキュリアンに代表されるように、幸福に生きるための実践に焦点が移動した。そのため、ローマ帝国の政治文化の中心圏では次第に理論面での学問の深まりが失われ、むしろ帝国の周縁部が理論面での学的発展を担った。そこはひとつは地理的な意味の縁であり、いまひとつはローマ市民に対する異端としてのキリスト教徒であった。

前者についてはたとえば、アテナイが依然、学ぶ者たちを惹きつけ、帝政期に新プラトン主義を育てることになったし、アレクサンドリアも、ギリシア的なものを維持しながら、帝政期を通じてキリスト教徒を含め、ローマの知とは異なる学問を深める場所として機能した。一例をあげれば、紀元前後を境に生涯を送ったアレクサンドリアの哲人フィロンは、文法、修辞、論理や幾何、天文、音楽を内容とする学問の重要性を指摘し、彼の場合はこれをリベラルアーツというより、エンキュクリオス・パイデイアとして徳や知恵に至る哲学という家に入るための玄関の階段、あるいは乳児の離乳食に当たるものと表現した。この比喩表現の背景には『創世記』があり、ギリシアの知とユダヤ・キリスト教との融和、哲学に対する神の知恵の結びつけが試みられている。

今からみれば、この仕事はリベラルアーツのその後の命運を決める「始めの一歩」だったことがわかる。これはイニシアティブが当人の意図を超えて発動された例でもある。しかも、この偶発的ともいえる無意図的な行為に潜勢していた力は少なくともその後の西欧中世期、1500 年にわたり影響を及ぼすことになる。

ローマ帝国全盛時のキリスト知

ローマ帝政期の知脈を捉えるうえでは、キリスト教の動きを明確におさえることがポイントになる。イエスが没して誕生したキリスト教初期のおよそ 200 年、すなわちローマ帝国最盛期から下り坂へと向かう五賢帝が君臨した時代におけるキリスト教の位置づけは東方の異端であり、教徒は社会の異界人であった。よって教徒は都市にあっても中心から離れた一定の区画に集まって他の市民との公的な交わりを避けて暮らしていたようである。パンとサーカスの繁栄と享楽の日々から一歩退いていたのだが、そのことがキリスト教にとっては帝政の不安と危機に影響されずに、確実な成

© 日本構想学会 2005

長と発展をもたらすことにつながった。むろん、交わらぬ者たちは高い攻撃誘発性を抱えることになるから、そのことが度重なる弾圧を誘うことにもなるが、その際もそれを契機にしてひとつの殉教のあり方として、隠者となって周縁の地に逃れ、そこで沈潜して知を深めたり、修道院を形成し、そこでローマでは育たなかった教育カリキュラムを形成していくことになる。キリスト教世界で初期の精神的指導者となった教父たちは多くの場合、ラテンリベラルアーツを学び、やがてその淵源となるギリシアの知を求めてアテナイやアレクサンドリアなどに修学の旅に出る。その過程で学びに対する迷いのなか、キリスト教に接して回心するといったパターンをとることが多かった。

その多様な知的経験はおのずと知性を豊かに綜合化する。ギリシア由来の知とキリスト教との融合も当然の成り行きで、好例に２世紀後半のアレクサンドリアでリベラルアーツの歴史にとって分水界をなす仕事をした教父にクレメンスがいる。彼はすでにフィロンがおこなっていた旧約とエンキュクリオス・パイデイアとの関係づけを新約とリベラルアーツにおいておこなうといういわばバージョン改訂をおこなった。彼はその他にもキリスト教とギリシア思想、とくにプラトン哲学の融合に先鞭をつけた先駆者たちの仕事を統合しつつ、聖書の解釈、信仰を説き明かす手段として哲学を重視し、神学の基礎をつくりあげる仕事をなしたのだが、その基礎教育にリベラルアーツをあてるという構造も導くことになった。

帝国の変化のなかで

M. アウレリウスを最後とする五賢帝後、３世紀にかけてのローマはさまざまな振動をみせながら下降線をたどることになる。ペスト流行の頻発と飢饉、重税に、パンもサーカスも過去のものとなり、各地で反乱が勃発する。加えて内部では帝位の争奪戦が生じ、外からは周辺民族が絶え間なく侵入してくる。結果、軍人皇帝による支配を導き、武を前面に出した執政に転化する。ローマは次第に混迷に対する軍事的統制の空気に満たされていく。リベラルアーツはどうであっただろうか。ここではそれがラテン的な陽光のもとでパクス・ロマーナの象徴ともいえる実学が雄弁家と並び、またみずからの事業を雄弁に語る構図のもとでとらえたわけだが、少なくともそのかたちの自由学芸は勢いを失せざるを得なかった。財政の逼迫と軍事への調達で、実学に潤いがなくなる。結果的にいえば、金のかからぬ部門、少なくともローマの華であった修辞を軸にその基礎としての文法や論理の修養を旨とする三学がその代表格となって、５世紀の西ローマ帝国滅亡の頃までローマのリベラルアーツは命脈を保つことになる。そのことは４～５世紀を生きた教父アウグスティヌスが『告白』に記した自らの教育体験から斟酌できる。

ローマの陰りと相対して存在感が増しつつあったキリスト教はどうであったか。教徒に対する迫害政策はそれまでも代々の皇帝の方針に依存して散発していたが、それがはっきりと大きくあらわれたのは、３世紀半ばに帝位についた皇帝デキウスのときである。この皇帝はローマ伝統の多神の祭儀を復興、全帝国民に参加を命じ、いわば神頼みを利した人心統一と帝国再建を図った。その背景にはすでに無視し得ないほどにキリスト教会の影響力が増していて、それがローマの治安悪化、帝国の統制力衰微に関与していることが感じ取れたことがあろう。ローマの神々の祭儀に参加しない教徒に対して、厳しい迫害がおこり、多数の殉教者が出たようである。教徒が帝国の抱えた強いストレスに対して身代わりの羊の役を買ってしまったわけである。

キリスト教徒たちはローマ繁栄の頃から、その状況を堕落とみて共に住めども一般市民の生活スタイルを反面教師にして自分たちの生活をわかりやすく律してくることができた。だから、社会経済的な苦境が訪れても、さして心を乱すことはなかっただろう。また、教徒の知識人たちはギリシア由来の哲学を聖書解釈に用いたり、哲学の限界を信仰のなかで乗り越えたり、そこに神学の基礎を築くなど思索の沈潜を進めてきていた。その結果、３世紀後半の段階では信念においてのみならず、知力においてもキリスト教会の勢力は確たるものになっていた。その結果、病気や貧困といった日常生活の具体的な救済も含めて、教会に救いを求める市民が増していったと考えられる。つまり、教会への信頼が帝政への不信と反比例して増していったわけである。

４世紀に入り、一時勢いを増したディオクレティアヌス帝のとき、高まりつつあった人心統制の危機意識も手伝ってローマ史上最悪といわれるキリスト教弾圧があった。だが、教会勢力は増大

© The Japan Society for the Study of Initiative 2005

の一途にあったから、その迫害が教会勢力に与えた影響は一時的なものに過ぎなかった。そのことの証左は十年後にローマ帝国におけるキリスト教の公認が成立した事実に端的にみることができる。公認に関わったコンスタンティヌス帝は引き続き、東方ローマの古都ビザンティオンに帝国の新都コンスタンティノポリスを建設。やがて4世紀末、キリスト教はローマ国教となる。

ローマ帝国がその領土を最大にした2世紀初頭、ゲットーに固まった異端の宗教から始まったここまでの約300年の歴史は、帝国とキリスト教会が見事に一対のグラディエーションをなして勢力を入れ替えた姿として鳥瞰できる。

また、3世紀以降の200年間、軍人皇帝時代の帝国ではローマ市民が事実上、臣民化し、食い扶持を頼って戦場に赴く姿が普通になった。学問は蔑ろにされ、市民から知識人が出るゆとりはなくなった。代わって知脈を担い育てたのは教会であった。知ることに動機づけられた人たちはギリシア由来の哲学を学ぶも、同時に聖書も読むことになる。知識人の代表はすぐれた教説により教える役割を担い、同時に模範的な生活を送ることで教会から権威を認められた人たち、すなわちキリスト教父で構成されるようになる。学ぶことの大きな課題は神と人間の関係を理解することによって人間存在の意義を知ることに向けられ、哲学とともに神学の位置づけが浮上してくる。それは知の淵源として学の王座にあったギリシア哲学がその先にある徳に対して入口に相当していることを示唆するものであった。だから、自由人の知の養い、すなわち人がみずからの力で哲学的問答をとおして修練していくことは、より大きなものに向けてのステップであるという構図がみえてきたのである。当然、さらにその手前、哲学にいたる学びの道におかれたリベラルアーツ学科目に対する見方もその観点から規定されていくことになる。

知を愛することとは

4世紀中盤以降、キリスト教がローマ帝国に公認されてからのち、その知脈のひとつは先に触れたクレメンスとその弟子オリゲネスのアレクサンドリア学派の系譜をつくる。その特徴は聖書解釈に比喩を用い修辞、思弁的手法を重視するもので、たとえば、キリスト教の根幹をなすドグマ、三位一体の教義の確立に大きく関わったニュッサのグレゴリオスはその流れに属する。彼が示した思弁的な構想のなかでも、知を愛することphilosophiaのsophiaは、同時にイエス＝キリストでもあるとした解釈は画期的であった。人は神の愛の対象である。よって人はその愛に目覚めることによって自分のなかの豊かさに気づいていくことになる。それはひたすら外部に知識を求めるような知ではなく、自分の内部に向けて深めていく知であり、そのように知を愛し、身につけることはすなわちイエスをみずからの内に受肉することに等しいという見方であった。ギリシア由来の自由人の知を愛する心をイエス＝キリストへの愛と重ね描きする知慮により、ギリシア—ヘレニズムの学知の流れはローマ—キリスト教の体系のもとに包摂される。ギリシアの知が目指した理性による認識は神への信仰のもとにおかれたわけである。

その他にもアウグスティヌスなど4〜5世紀に生きた教父たちは神のことばを聴き、そこにたどりつくことと知ることの一致、信仰と知の両立がなされることを語り、以降、長く続く西欧中世の思潮をかたちづくることになる。

自由七科のイニシアティブ

ギリシア由来のエンキュクリオス・パイデイアをラテンリベラルアーツへと展開したキケロやヴァロの時代から500年の時が流れた。いまや聖書はラテン語訳が普及し、もともと学校的な制度に親和性をもっていた教会組織は初等教育を含む教育機関の役割も担い、現実的に社会に貢献するようになってきた。初等教育から学びを進めていくプロセスの先には聖職者へ至るパスが成立し、国教となってからは、いわゆるエリートコースになった。そのようななか5世紀末、西ローマ帝国滅亡直後、マルティアヌス・カペラの書いた『メリクリウスとフィロロギアの結婚、そしてセブンリベラルアーツ9分冊』が登場する。

この書は新郎メリクリウス(マーキュリー、雄弁の神)がアポロの媒酌によって新婦フィロロギア(ことばを愛する者、文献学)と結婚するというアレゴリーになっている。その式で新郎は新婦に7人の侍女を贈る。その侍女たちは文法、修辞、論理、数論、幾何、天文、音楽の7人で、それぞれが祝辞を述べつつ自己紹介するという趣向になっている。ここに今日、しばしば自由七科と呼ばれるリベラルアーツの7つの構成が具体的に

© 日本構想学会 2005

示されたわけである。

興味深いことに、この結婚式には建築術と医術も列席しているのだが、終始押し黙ったままの存在として扱われ、その位置づけが黙示されている。すでにみたようにラテンリベラルアーツにおいては、実学称揚のなかで建築術や医術もリベラルアーツの第一線にあった。だが、帝国が傾き、変わってキリスト教文化が浸透する時期にあわせて建築や医術は再び職人芸の世界に退き、数学諸科も実学的側面を後退させ、象徴世界の理解や神秘主義との相性をよくしながら錬金術や占星術の方向に潜勢していく流れが導かれたとみることができるだろう。

カペラのこの書は表面的にはキリスト教のもとでの文化形成という色彩が濃くなった当時の学問状況を擬人化にわかりやすくあらわしただけであった。だが、その歴史的影響力はかなり大きかった。彼にどれほどの意図があったかはわからないが、そこに規定された７つの構成がいわく言い難い堅牢な象徴的意味を携えてラテンリベラルアーツの終焉と、それのキリスト教的呪縛を負ったセブンリベラルアーツの始まりをもたらすことになったのである。

セブンリベラルアーツの確立と呪縛

３世紀頃からキリスト教会では当初、帝国からの迫害を引き受け、ひとつの殉教を果たす場として修道院ができはじめた。やがて５～６世紀頃になると、修道院は修行の場としての積極的な意味を発展させつつ整備され、本格的な付置学校もできるようになる。そのイニシエーターの一人に南イタリアで修道院学校を創設したカッシオドルスがいる。

彼は教育体系の整備にも力を尽くし、その代表的著作『聖学ならびに世俗的諸学綱要』では聖書理解のための予備知識として「世俗的諸学」セブンリベラルアーツを紹介している。ただし、七科のうち文法、修辞、論理の三科はまさに自由学芸と呼ぶにふさわしいとされ、他の学問のための基礎として位置づけられる。残りの数論、幾何、天文、音楽の四科は数学諸科 (mathematica) であって、理論的な学として哲学の一分野に位置づけられ、三学芸とは異質としている。

また、カッシオドルスと同時期に生きた哲学者ボエティウスも著作『三位一体論』などにおいて同様の自由学芸の学問分類をおこなっている。ボエティウスはプラトンを敬愛し学んだことから、学問分類にはあきらかにその影響が反映されている。つまり、カッシオドルスと同様、セブンリベラルアーツのなかでも四科を基礎学としての三科とは別のカテゴリーに配置している。

このように、ふたりともセブンリベラルアーツというカテゴリー化は避けたのだが、それでも７つの学を列挙することはためらわなかった。その背景には世俗の学という括りで、７という数をもってこれらを指し示すことの便益が捨てがたかったのだろう。たとえば、カッシオドルスは著作のなかで７という数字が聖書のいたるところで持続や永遠を象徴していることに触れている。

加えて聖学のもとに構築される教育体系にリベラルアーツをそうした象徴を付して組み込むことも好都合であった。もともとリベラルアーツの淵源にある力、その自由性はキリスト教内部では信仰に対する攪乱要因として疎まれていた。そのため、カッシオドルスたちの構想には、リベラルアーツを忌避することで、教会教義とは別の場でそれらが学ばれていくことや自由人たちの学知のラテン語訳が無軌道に出回るようなことが起きてしまうよりも、むしろそれらを反動形成的に取り入れた上で、聖書理解のための基礎学としてはっきりと位置づけてしまう方が得策と考えたのかもしれない。ともかく、この６世紀の初頭に、現代に至るまで「リベラルアーツ、いわゆる自由七科」と説明されるいわば歴史的呪縛の始源をとらえることができるのである。

とはいえ、その後、現代までにリベラルアーツが歩んだ道程は決して単純とはいえず、大きくはそのあいだにルネサンスや大学の誕生が絡んでくる。そこにおいても宿命ともいえる別種の抑圧の網が被されることになるのだが、それについては次の機会に検討したい。

脚注

*1　ここではキケロ、ヴァロ、ウィトルウィウス、ガレノス、クインティリアヌス、セネカのあげた科目を対象にしている。ただし、このうちセネカの取り上げ方は異質で、とりわけ文法、音楽、幾何、天文を例にあげて当時のリベラルアーツが美徳を学ぶ人生の実践哲学にとっては直接的には役に立たないことを主張している。

2005 年 12 月 3 日　受稿

© The Japan Society for the Study of Initiative 2005